

生きているうちに

2年 S・いくん

「ほんとにほほ。」ひかる石から聞こえた声はだれの声なんだろうと、ぼくは思いました。読みすすめていくと、その声は、楓くんのママの声だということがわかりました。つまり、ひかる石は、亡くなった楓くんのママと会話できる石だったのです。楓くんのママは亡くなっていたのです。

さいしよ、楓くんは、ママは遠くへ行ってしまっただけで、またいつかもどって来てくれると思っていました。しかし、友だちからママが亡くなったことを知らされて、楓くんはかなしくて声が出なくなっていました。もし、ぼくのママが死んでしまったら、朝のぼくのペン強につきあってくれたり、ぼくの大好きな鉄道のイベントをよやくしてくれたり、学校の図書ボランティアで読み聞かせをしてくれたり、図書かんでぼくが好きそうな本をかりてきてくれたり、朝ごはんにぼくの大好物のネギト口丼を用意してくれたりできなくなります。それに、たくさんの思い出があるので、もう二度と会えないと思うとかなしくなります。

ぼくのママが死んで、ぼくに話しかけてくることは、きつとイヤリングになっていると思います。なぜなら、ぼくのママはイヤリングが好きで、たくさんあつめていたからです。そうしたらぼくは、しゃべるイヤリングをずっと自分の耳につけていると思います。それをそうぞうすると、少しわらってしまいました。でもママが死んでしまうと、ママのりょう理は二度と食べられないし、ママの顔を見る事もできません。

ぼくは、大おばさんが亡くなって、おそうしきに出た事があります。生きていた時の大おばさんは、やさしくて、おもしろくて、家におじやました時に、だっこしてスカイツリーを見せてくれました。でも、おそうしきの大おばさんは、目をとじてほほえんでいるだけで、ひょうじょうはわかりませんでした。おもしろくかわらせてくれる大おばさんには会えないと思うと、かなしくなりました。

死ぬという事は、地きゅうからいなくなるという事です。死んでしまったら、その人と新しい思い出を作る事はできません。生きているという事は、思い出を作る事ができるという事です。ぼくは、いのちを大切に思っ、思い出をたくさん作っていききたいです。